Old Style
Kentucky
Whisky
HISKY THAT MADE KENTUCKY WHISKIES FAMOUS
RLY TIMES

バーボン・ストリート

沢木耕太郎

新潮社

バーボン・ストリート

著者／沢木耕太郎（さわき こうたろう）

■

発行／昭和59年10月15日
2刷／昭和59年11月5日
発行者／佐藤亮一
発行所／株式会社新潮社
〒162／東京都新宿区矢来町71／振替東京4-808
tel.／業務部03(266)5111・編集部03(266)5411

■

印刷所／二光印刷株式会社
製本所／株式会社大進堂

■

定価／1000円

©Kōtaro Sawaki, Printed in Japan. 1984

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。
送料小社負担にてお取替えいたします。

日本音楽著作権協会(出)第8462112-401号

ISBN4-10-327504-9 C0095

バーボン・ストリート／目次

奇妙なワシ　7
死んじまってうれしいぜ　23
クレイジー・クレイジー　39
わからない　53
ポケットはからっぽ　71
風が見えたら　87
そんなに熱くはないけれど　103
運のつき　119

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

シンデレラ・ボーイ　139
彼の声　彼の顔　153
角ずれの音が聞こえる　169
退屈の効用　185
寅、寅、寅　201
ぼくも散歩と古本がすき　217
トウモロコシ畑からの贈物　235
あとがき　250

装幀　平野甲賀
装画　小島　武

バーボン・ストリート

奇妙なワシ

ワシ、である。

鷲。ワシタカ科の猛禽。大形でつばさが広く、せなかは濃い茶色で、腹は白い。くちばし・つめは鋭くてまがり、鳥獣を捕えて食う。

と、辞書にはそのようなことが記されている。

たとえば、丸山健二は群れを拒絶するシンボルとしてイヌワシへの讃歌を書いたし、開高健はハゲタカならぬハゲワシを定義するところからその戦場の博物誌を書きはじめた。たとえば、沖縄出身のボクサー具志堅用高のニックネームはカンムリワシだったし、北海道の知床半島にはオジロワシが棲息する。だが、これから私が語ろうとするのはそのどれでもない。この世に存在しないワシ、しかし、にもかかわらず、毎朝の通勤電車の中には必ず何羽かは見つけることのできるワシ、その意味ではまさに奇妙なワシとでも言うよりほかにないようなワシ、についてなのである。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ある若手の演技派の女優が、自分の父親が死んだ時、不意の悲しみに見舞われた人は必ずしもワッと泣き伏したりしないものだということを知った、とどこかで語っていた。確かに、二流の映画やテレビドラマでは、今もなお、ワッと泣き伏したり、胸倉を取って詰問したり、肩を叩いて励ましたり、といった紋切型の演技を平然と罷(まか)り通らせているようなところがある。しかし、紋切型の表現を恥ずかし気もなく頻出させることにかけては、新聞や雑誌などのいわゆる活字ジャーナリズムも決してひけはとらない。本多勝一は、その『日本語の作文技術』の中で、特に紋切型という一項を設け、うんざりしたような調子で列挙している。

《「ぬけるような白い肌」「顔をそむけた」「嬉しい悲鳴」「大腸菌がウヨウヨ」「冬がかけ足でやってくる」「ポンと百万円」……／雪景色といえば「銀世界」。春といえば「ポカポカ」で「水ぬるむ」。カッコいい足はみんな「小鹿のよう」で、涙は必ず「ポロポロ」流す》

とりわけそれがスポーツ新聞になると、紋切型の氾濫(はんらん)はとどまるところを知らないという感じになる。ピッチャーの快速球はいつでも「唸(うな)るよう」であり、痛烈なゴロの打球は「地を這うよう」であり、外野からの好返球は「矢のよう」であり、ライナー性のホームランは必ずスタンドに「突き刺さ」るのだ。ボクシングやプロレスリングといった格闘技に血はつきものだが、少しでも出血すると「血みどろ」になり、「流血の死闘」になってしまう。どうやらスポーツ・ジャーナリズムと紋切型の表現とは腐れ縁に近い関係にあるらしい。あの三島由紀夫でさえ、スポーツ新聞の観戦記などということになると、「海老原は、まさに弓から放たれた矢

のやうだつた」とか、「鞠のやうに転がり込む海老原」といった紋切型を連発してしまう。

スポーツ新聞は紋切型の宝庫である。それは少ない字数で、しかもできるだけ速く書かなければいけないスポーツ記者にとって、わかってはいるがなかなかやめられない一種の麻薬のようなものかもしれない。類型的な表現を使わず、それでいて正確克明に描写するということはやさしいことではない。試合終了後、数十分以内に電話送稿しなければならないというような綱渡りをしている彼らには、多少文章の力を弱めることになっても、やはり速く書き進められる紋切型に頼らざるをえないところがあるのだ。

そう考えてくると、スポーツ新聞に氾濫する紋切型もあまり気にならなくなってくる。ただひたすら御苦労様と思えてくるだけだ。唸るのも、地を這うのも、突き刺さるのも、それはそれで構わなくなってくる。しかし、私には、紋切型の表現の中で、どうしても気になって仕方がない言葉がひとつだけある。記事を読んでいて、その言葉が出てくると、急に落ち着きが悪くなってしまう。それが《ワシ》だ。

先日、あるスポーツ紙に、ジャイアンツの角三男が大きく取り上げられていた。彼が、首脳陣に対して来季からはリリーフでなく先発にしてくれと要求を突きつけた、というのだ。もうストッパーはやりたくない、なぜなら自分だけ全試合のベンチに入るというような損な役回りをさせられるのは御免だから、というのが角の主張であるらしい。それに対して、同じリリー

フ投手の先輩としてという意味なのだろう、江夏豊がコメントを求められ、こう語っていた。

「わかるんだなあ、角君の気持が。痛いほど、わかる。

プロのメシを十六年間も食わせてもらい通算２０３勝（１５２敗）１５１セーブをあげたワシ。プロを代表する救援王とかいわれているけれど、プロ入り十年間に先発であげた１６７勝の方が胸に焼きついている。いまでも、だれにも汚されていないマウンドを踏むのが夢なんや」

痛いほどわかるのは、これを書いた記者の気持である。誰がどう考えても、まっとうな人間が「通算２０３勝１５１セーブをあげたワシ」などという話し方をするはずがない。しかしこの記者は何がなんでも談話の中にそのデータを盛り込みたかったのだ。だから、談話としてはおよそ不細工な形になるのを承知の上で、あえて「……をあげたワシ」とやってしまったのだろう。だが、私にとりわけ気になるのは、そのような不器用な挿入より、《ワシ》という人称代名詞の存在である。

江夏はスポーツ新聞に登場させられると、必ずワシという一人称を使わされることになる。一匹狼、自分勝手、強心臓などという表面的な印象が、江夏をワシという人称代名詞と不可分のものにしてしまった。しかし、私には、あの精密な投球法と明晰（めいせき）でいて繊細な喋（しゃべ）り方から考えるかぎり、どうしてもワシというような言葉づかいをする男には見えないのだ。そこで試しに、川上健一の『サウスポー魂』を取り出してみると、江夏の語りの部分は「おれ」となって

いる。山際淳司の『スローカーブをもう一球』では「オレ」である。いずれにしてもワシでないことは確かなようなのだ。

ファイターズの大沢啓二もよくワシと言わせられるひとりだが、インタヴューの折に注意深く聞いているとオレと言っているのがわかる。カープの山本浩二も、元ドラゴンズの星野仙一も、ワシと書かれる多くの野球人が、実際はそれ以外の人称代名詞を使っている。一人称の代名詞としては、他にワタシもあればボクやオレもあるのだが、なぜかスポーツ新聞の記者たちはワシを使いたがる。当人がワシと言っている場合には問題ないが、オレ、ボクを使っている場合にも、勝手にワシと変えてしまうのだ。

ワシという一人称が使われるのは野球の世界ばかりではない。むしろその本家は相撲にあるといえるだろう。スポーツ新聞だけでなく、一般紙や週刊誌でも、力士の談話を載せる場合には必ずワシとしてしまう。

テレビの相撲中継を見ていると、横綱大関を倒し、金星銀星をあげて花道を引き上げてきた力士をつかまえ、アナウンサーがインタヴューをすることがある。どうにか話を引き出そうとするのだが、ヒーローは肩で息をするばかりでなかなか口を開かない。

「快勝ですね」

「……」

「立合いの突っ込みが素晴らしかった」
「……」
「鋭く当たって、すぐに左で前ミツを取りましたね」
「……」
「注文通りですか？」
「……」
「でも、そのあとがまた速かったですね」
「……」
「体を開いての左下手出し投げ」
「……」
「あれはとっさの判断ですか？」
「……」
「それにしても強烈でした。さすがに腰の重い横綱も残せませんでしたからね」
「……」
「横綱とはだいぶ相性がいいようですね」
「あー……」
「そうですか。まずは会心の一番、おめでとうございました」

「……」
「それではこれでインタヴューを終ります。どうもありがとうございます」
「どうも……す」
まったく力士のインタヴューほど難かしいものはないような気がするが、このやりとりが翌日のスポーツ新聞に再生されると、信じられないような談話になってしまう。
「立合い鋭く当たって左で前ミツを取るというのがワシの注文。左で下手出し投げを打ったのは、体の方で勝手に動いてくれたからだ。横綱があの投げを残せなかったのは、まだ十分に腰がよくなっていないからだろう。相性がいいって？　まぐれだよ。でも、ワシにとっては今場所最高の一番。きっと今夜の酒はうまいだろうな」
一言しか喋らなかった彼が、実に能弁な力士に変容させられてしまう。質問が彼の言葉になり、曖昧な点は記者の主観によって断定されてしまう。そして、ただの一度も一人称を使っていないにもかかわらず、ワシと言わせられてしまうのだ。

私がこの《ワシ》に興味を覚えるようになったのは、ボクサーの輪島功一の取材をした時以来のことである。韓国の柳済斗に奪われた世界J・ミドル級の王座を取り返すべく、きついトレーニングで自分の体を痛めつけていた輪島を、ある期間そばにいて眺めつづけるという仕事をしていたのだ。試合は十五回KOで輪島が劇的な勝利を収めた。話はその夜のことだ。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com